

動画アノテーションを活用した 日本語教師のための 自己研修システムの実践

青木さやか

◆要旨

本稿は、動画アノテーションを活用した日本語教師のための研修システムを、日本語学校で実践した報告である。動画アノテーションには、FishWatchr というツールを使用した。

本実践では、ある日本語学校で実際に行われた4つの授業をビデオカメラで撮影し、その授業を行った4名の日本語教師が、授業動画に対して、相互にアノテーション（ボタンによる評価・コメントの記入）を行った。そこで得られたアノテーションの回数、コメント、時間などを分析した。

その結果、動画アノテーションを活用し授業観察を行うと、印象評価になりがちな授業観察において、教師らの授業観察の観点や評価などが明確な相互観察・相互評価ができることがわかった。

◆キーワード

動画アノテーション、日本語教師、研修システム、日本語学校、FishWatchr

◆ABSTRACT

In this paper, we practiced a training system for Japanese language teachers which utilizes video annotations of actual Japanese language school classes.

In practice, four classes conducted at a Japanese language school were shot separately with a video camera. The videos were then annotated by the respective instructors in charge of each class using a tool called FishWatchr. Afterwards, we analyzed the amount, frequency, contents, and timestamps of said annotations and comments.

We found that in this training system, detailed annotations were performed on the class videos, such as using class videos, setting a viewpoint for class observation, and entering comments. When class observation was performed in this way, it became clear that observation was performed more objectively without relying only on memory and subjectivity.

◆KEY WORDS

video annotation, Japanese language teacher, training system, Japanese language school, Fishwatchr

Practicum of a Self-Training System for Japanese Teachers Using Video Annotations

SAYAKA AOKI

1 研究背景

近年、日本語教育界では、内省的実践家や自己研修型教師の養成が求められており、そのためには教員研修が必要である。しかし、複数の教師が集合し、研修として授業観察を行うことをイメージすると、授業全体の印象評価になってしまうことや、同席した教師に遠慮し意見を述べられないこと、研修の時間が十分に取れず、すべての評価や意見を集約できないこと、教師同士の評価や意見を共有しきれないことも考えられる。

このようなことから、実際の授業動画を使用し、日本語教師が動画に対してアノテーションを行うことによって、より詳細に観察や評価ができるのではないかと考えた。ここでのアノテーションとは、教師があらかじめ授業を観察する観点を設定しておき、動画に対する評価や意見を明示することを示す。また、複数のアノテーション結果を比較することで、主観的な個人評価から客観的な相互評価につながるのではないかと考えた。今回の実践では、FishWatchrを使用した。FishWatchrとは、動画を見ながらアノテーションができ、複数の結果が統合された状態で表示されるツールである。今回の実践では、以下をリサーチクエストとした。

- ①動画アノテーションを使用して、客観的な観察が行えるか
- ②個人的な評価を共有し、相互評価が行えるか

2 先行研究

岡崎・岡崎 (1997) は、内省的実践家について、「自分（や他の教師）のクラスで繰り広げられる教授・学習過程を十分理解するために、自分（や他の教師）の教授過程を観察し、振り返る中で教授・学習過程の重要な諸点を発見していく教師である」と述べている。嶋田 (2019) は、「より重要なのは、実践の現場において教師同士で実践を共有し、ともに振り返ることである」と述べ、文野 (2010) は、「授業分析や考察の作業は仲間との対話を通じて行うことでより効

果的になる」と述べている。

授業を観察する方法としては、横溝・迫田・松崎 (2005) のように、「教師の発話」、「教師の行動」、「教材の使い方」などいくつかの観点を設定し、さらに、「その他気付いたところ」「感想」の部分で自由記述をさせるなど、観察の視点を狭めない工夫がされているものがある。

FishWatchrについては、日本人大学生を対象としてディスカッション練習における観察と振り返りを行った山口・大塚 (2015) や、日本語授業評価に使用した西谷 (2018) などがあるが、日本語学校での実践はこれまで行われていない。

3 動画アノテーションを使用した相互観察の方法

3.1 アノテーション (Annotation) とは

アノテーションとは、「あるデータに対して、関連する情報を注釈として付与すること」と定義される。「動画に対してアノテーションを行う」というのは「動画を見ながら、気になったところでボタンを押して反応する」ということを表す。

3.2 本実践の方法

今回の実践では、以下に重点を置いた。

- ①日本語学校で行われた実際の授業の動画に対して、
4名の教師が相互アノテーションを行うこと
- ②FishWatchrを使用し、観点を設定してアノテーションを行うこと

3.2.1 4名の教師による相互アノテーション

4名の教師は、まず、日本語学校で実際に行っている自身の授業をビデオカメラで撮影した。今回の実践では、既存の日本語授業ビデオなどではなく、実際に日本語学校内で行われた通常授業を撮影しアノテーションのための動画として使用した。教員研修には、学校などを想定した「日本語教育の様子」を撮

影し、適宜編集した既成の動画などを使用し、観察を行い、意見を出すような方法も考えられる。しかし、今回の実践では、実際に教師らが勤務している日本語学校で行われた授業を使用した。実際に行われた授業を観察するほうが、「同僚の教師がどのように授業を行っているか」に興味を持ち、積極的に、且つ詳細にアノテーションできるのでないかと考えたからである。

その後、授業動画に対して、授業を行った教師が一番初めにアノテーションを行った。その後、そのデータが入った状態のもの(ⒶA)を他教師(B)に渡し、授業者の意見がわかる状態でアノテーションを行った(ⒶAB)。

授業を行った教師(A)が一番初めにアノテーションを行うようにしたのは、「A自身が授業をどのように評価したか」を理解しているほうが、他教師にとってアノテーションしやすいのではないかと考えたためである。

その後、教師C、Dも同じようにⒶAにアノテーションを行い、ⒶAC、ⒶADのデータを作成した。その後、ⒶA、ⒶAB、ⒶAC、ⒶADを統合し、ⒶABCD(Aの授業に対する、全教師からの評価)を結果として抽出した。

【教師Aの授業動画】

① ↓ ← 教師A自身によるアノテーション

【動画ⒶA】

(Aのアノテーション結果が入った状態のデータ)

② ↓ ← 教師Bによるアノテーション

【動画ⒶAB】

(教師Aのアノテーションに教師Bがアノテーションを重ねた状態のデータ)

ⒶA + ⒶAB + ⒶAC + ⒶAD = ⒶABCD

(教師Aの授業に対する全教師のアノテーション統合データ)

図1 相互アノテーションの手順

同様に、教師Bの授業、Cの授業、Dの授業に対しても4名の教師からアノテーションが行われ、今回の実践では、4つの授業に対して合計16件のデータが得られた。(表1参照) 下表の自己ATというのは、自身の授業に対するアノテーションで、他者ATというのは、他教師の授業に対するアノテーションである。

表1 4名の教師による相互アノテーション

	Aの授業に	Bの授業に	Cの授業に	Dの授業に
教師A	自己AT	他者AT	他者AT	他者AT
教師B	他者AT	自己AT	他者AT	他者AT
教師C	他者AT	他者AT	自己AT	他者AT
教師D	他者AT	他者AT	他者AT	自己AT

*AT = アノテーション

3.2.2 FishWatchrとは

FishWatchrとは、教育活動の観察と観察結果の振り返りを支援するために国立国語研究所の山口昌也氏によって開発されたツールである。このツールは、ホームページから無料でダウンロードでき、USBの中に入れておけばPCにインストールすることなく直接実行できるものである。観察結果はグラフなどで視覚化され、動画とともに振り返ることができる。

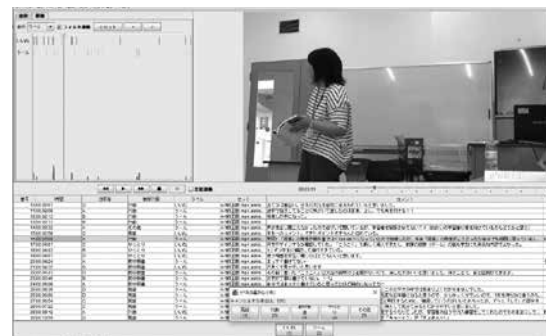


図2 FishWatchrデータ入力画面

アノテーションは、動画を見ながらボタンを押して評価を行う。また、なぜそこでボタンを押したのか、という根拠や感想を伝えるコメントも残すことができる。動画は繰り返し再生することができ、修正・削除も即座に行うことができる。前述のように、「同一の動画に対するアノテーション結果」は統合することが可能である(図1のⒶABCD参照)。動画が1つあれば、多数のアノテーションを行い、結果を統合し比較することができる。アノテーションには、動

画の長さに対して約2倍以上の時間がかかることが考えられる。アノテーション実施者の負担になると結果に影響が出る恐れがあるため、もとの動画の長さを調整する必要がある。

FishWatchrは評価ボタンの表現や個数の設定が自由にできる。しかし、ボタンの表現を「なんとなく押しにくい」と感じるようなものにしたたり、ボタンの数が多すぎたりすると、実施者の負担になりアノテーション結果に影響を及ぼす恐れがあるので、注意が必要である。

3.2.3 今回の実践でのFishWatchrの設定

今回の実践では、FishWatchrでアノテーションを行う際のボタンを2種類設定した。評価ボタン（「いいね」「うーん」）と、観点ボタン（①教師の行動、②教師の話し方、③教材・板書について、④学習者とのやりとり、⑤その他の5つ）である。評価ボタン「いいね」は、アノテーション実施者の高評価を意味し、「うーん」は低評価を意味する。評価ボタンを押すとその後観点ボタンがポップアップし、選択することができる（下図参照）。

観点ボタンは、横溝・迫田・松崎（2005）の中で授業観察の観点として設定されていたものや、その他の実践（教育実習の振り返り、授業観察など）で観点に設定されているものを参考にした。2種類のボタンを設定したのは、教師たちが「どの観点で、どのような評価を行ったか」を明確にするためであるが、ボタンについては、表現と個数がアノテーション結果に影響を与えることが考えられるため、検討の余地が大きい。

アノテーション後は、以下のように、経過時間、アノテーション実施者、観

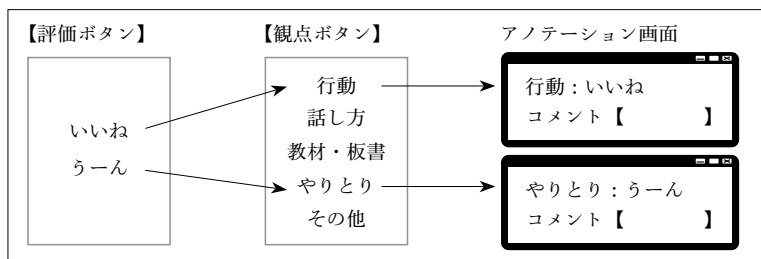


図3 ボタン設定イメージ

察の観点、評価、コメントなどが一覧で表される。

番号	時間	注釈者	観察対象	ラベル	セット	コメント
1:00:00.04	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	っていろいろほ 正しくほ (~と)いろいろほ	
2:00:00.12	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「正式」というより「カジュアルな場面で使うことがあり」という意味だった	
3:00:00.38	C	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「です+ます」が大切であることと説明して、尊敬語・謙譲語への不安があると思う	
4:00:00.59	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	前後の日本語が、理解できずわからなくなっている	
5:00:01.07	C	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	3人の学生への説明と考えると、説明が難しいのではないかと感じた。「自分を下げることで」	
6:00:02.01	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
7:00:02.02	A	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
8:00:02.03	C	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
9:00:02.13	C	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
10:00:02.14	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
11:00:02.35	A	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
12:00:03.33	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
13:00:03.54	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
14:00:04.58	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
15:00:05.46	D	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
16:00:07.57	C	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	
17:00:08.26	C	実施者	うーん	D MOV_aasis_m_DESK	「うーん」でわかる、意味がわからない。みんな日本語教師に日本語表現が変い。たくさん練習が得ます	

図4 アノテーション画面（拡大）

3.3 本実践の概要

3.3.1 対象

今回は、同一の日本語学校に勤務する教師4名を対象とした。教師らは、おたがいに面識はあるが、ほとんど会話をしたことがない。CとDのみ、学校運営などでコミュニケーションを取ることがある。この4名の教師を対象としたのは、全員が日常会話の中で教師研修に対して意欲的な態度を見せ、また、現在担当しているレベルやクラスの重複がなかったためである。

表2 4名の教師の背景

	A	B	C	D
日本語教育経験	約4年	約6年	約9年	約3年
現在の担当レベル	中級前半	中級後半	上級	初級前半
現在の学校での勤務形態	非常勤	非常勤	常勤	常勤

3.3.2 授業動画

4名の教師は、それぞれの授業をビデオカメラで撮影した。担当している授業の中でどの授業を撮影するかは教師本人に一任した。その際教師らは、研修に使用することを考慮し、学習者と教師のやりとりが少ない授業や、グループ活動など複数の音声が入る可能性がある授業は避けたほうがよいことを理解し

たうえで授業を選択した。教師は教室内にビデオカメラを設置し、教師が授業中に立つ場所を中心に、ホワイトボードやスクリーンが映り込むように録画を行った。その後、録画された動画を授業開始時点から15分程度で切り、アノテーションのための動画とした。表3はそれぞれの教師の授業を切った後の動画の長さを表している。時間に5分程度差があるのは、学習者とのやりとりの切れた時点や、活動が終了した時点が異なっているためである。

表3 編集後の授業動画の時間

学校の授業時間 (1コマ)	教師Aの授業	教師Bの授業	教師Cの授業	教師Dの授業
45分	16分43秒	19分29秒	21分07秒	17分25秒

3.3.3 教師に対する実施方法の導入

今回の実践では、アノテーションの方法を導入する際、アノテーションの方法、実践の概要などをまとめ、4名の教師に筆者が提示した。FishWatchrは口頭説明だけではイメージしにくいいため、画像資料なども用意し、PCでアノテーション時に行うこと（ボタンを押す・コメントする）を練習した。

その際、「コメントは入力することができるが、任意である」と説明したが、「授業者が「質問」と記入しているコメントに対しては、自身の意見を述べることを確認した。どのような文体で入力するか、どのくらいの長さのコメントにするかなどについては言及しなかった。また、終了までの時間や、アノテーション数の多寡に関しても言及しなかった。

4 4名の教師による相互アノテーションの結果

4.1 アノテーションの詳細

16件のデータには、合計で169回のアノテーションが行われ、得られたコメントは、合計で7901文字あった。

4.2 アノテーションの時間

教師がアノテーションを行う際、開始の合図をしてから終了までの時間を計測した。途中で中座した時間、FishWatchr操作についての質問にかかった時間は含まれていない。表4はそれらをまとめたものである。

表4 アノテーション所要時間

	Aの授業 (16分43秒)	Bの授業 (19分29秒)	Cの授業 (21分07秒)	Dの授業 (17分25秒)	合計
A	30	37	40	38	145
B	26	22	35	25	108
C	45	35	85	58	223
D	45	40	42	33	160
合計	146	134	202	154	636

*単位：分

アノテーション方法導入時に、「時間制限はない」ことが明示されていたため、教師たちは自身で終了するタイミングを決めることができた。結果を見ると、Aはどの授業のアノテーションに対してもおよそ動画の2倍の時間をかけていることがわかる。反対にCは、自己アノテーションのみ、動画の4倍の時間をかけていること、Dは自己アノテーションの時間が最も短くなっていることがわかる。

4.3 観点ボタン

表5は、使用された観点ボタンについて、教師ごとにまとめたものである。

表5 アノテーションに使用された観点ボタン

	行動	発話	教材板書	やりとり	その他
教師A	10	13	2	3	3
教師B	8	18	1	6	0
教師C	11	27	5	11	2
教師D	5	13	5	20	4
観点ボタン別合計	33	71	13	40	9

(不特定3含む)

観点ボタンについての集計を見ると、4名の教師は特に「教師の発話」に着目し、アノテーションを行っていることがわかる。観点ボタンの「その他」については、授業中の活動の位置づけについての質問や、教室内の物品についての指摘、また授業全体に対する感想などがあった。

5 考察

5.1 マージ（データの統合）前の客観的な観察

教師の行ったアノテーションの結果を確認すると、マージ（データの統合）を行い、他教師の結果と比較する前でも、客観的な観察が行われていることがわかった。表6は、教師が自身の授業に対して行った「自己アノテーション」からの抜粋である。

表6 自身の授業に対するアノテーション 抜粋

教師A		
教材板書	うーん	自分ではまっすぐ書けていると思ってたけど斜めになってる…
教師B		
発話	うーん	話すスピードが速い。
教師C		
やりとり	いいね	学生に違いの説明を求めたが、的を射なかったので追加でQを出している。

教師Aは、授業時は「文字がまっすぐに書けている」と感じていたが、実際に授業動画で観察し、「斜めになっている」ことに気づき、低評価をつけている。同様に教師Bは自身の授業の音声を客観的に聞き、「話すスピードが速い」とコメントしている。これらのことから、動画を使用して授業観察を行うことで、授業時は、「できている」と思っていたことが実はできていなかったことなどを客観的にとらえることができる。

教師Cは学生とのやりとりに着目し、学習者に対して追加の質問を行ったことを自身で評価している。このようなこと（学習者との複数回のやりとり）は、授業中に正確に（発言者や内容など）記憶するのは難しいため、動画アノテーシ

ョンを使用して授業観察を行ったことで「客観的な評価」ができたといえるだろう。

さらに、授業者自身が、行ったアノテーションの結果を分析していけば、「自身はどの観点で授業観察を行っているのか」や「どのようなことを高く評価する傾向があるか」について考えることもできるだろう。

以上のように、動画アノテーションを使用すれば、自身のアノテーション結果を他教師のものと比較する前でも、客観的に評価を行うことができる。

5.2 データマージ後（データ統合後）の比較

今回の実践では、2種類のボタンを設定し、教師が「どの観点で」「どのような」評価を行っているか明確になるようにした。実際に行われたアノテーションの結果をマージ（結果のデータを統合）すると、以下のような例が見られた。

5.2.1 同じ時点に異なる観点からの観察が行われている例

表7は、教師Cの授業のアノテーション結果を統合したものからの抜粋である。

表7 教師Cの授業に対するアノテーション結果（マージ後） 抜粋

02:01	A	発話	いいね	「ジュージー」に触れるだけでなく、学習者のアイデアの「爆発」を取り上げて、さらに学習者側から補足している
02:08	C	行動	いいね	「爆発」のジェスチャー
02:11	B	行動	いいね	口の中で汁が爆発するという様子がイメージしやすい。

ここでは、教師Cが「ジュージー」という語彙を説明する際、口の中で汁が爆発する、というイメージをジェスチャーとともに学習者に提示した場面であった。アノテーションを見ると、10秒間のあいだに教師A、B、Cがともに高評価をつけているが、教師Aは発話、教師B、Cは行動をアノテーションの観点としている。コメントからは、教師Aが発話の内容（学生の言葉からヒントを得て発話したこと）に触れているのに対し、教師B、Cは語彙をジェスチャーで説明したことと、そのジェスチャーによって生まれたイメージに言及している。

このように、同じ時点にアノテーションが行われていても、ボタンを設定し

たことによって、「異なる観点で観察が行われていること」が明確になった。教師がこの結果を共有すれば、異なる観点で再度観察できる可能性がある。実際にこの教師Cは、教師A、Bのアノテーション内容を確認し、「自分でも評価したところをしっかりと見てもらえたという感じがする」と述べた。

5.2.2 異なる時点に同じ観点で観察が行われている例

表8は、教師Cの授業に対して行われたアノテーションの結果からの抜粋である。アノテーションが行われた時点は異なっているが、コメントに使用された表現から、「学習者に考えさせることの重要性」という観点で観察が行われていることがわかる（教師Dの選択した観点は教師A・Cと異なっているが、コメントの内容から、同様の視点を持って観察が行われていることがわかる）。これは、実践を行った教師に結果を提示した後、雑談の中で、「学校全体にそのような、学生に考えさせる、話を展開していくことを良しとした考え方があるため、複数の教師がこのような観点を持っているのではないか」という話が出た。

このように、結果をマージしたことで教師のアノテーション内容が比較しやすくなり、他教師の意見がとらえやすくなる。

表8 教師Cの授業に対するアノテーション結果（マージ後） 抜粋

01:07	A	発話	いいね	「フルーツ」との違いや強調したかったことは何かを学習者に考えさせる言い回しがうまい（言葉数は少なく、意味は伝わりやすいという意味でも）
03:07	D	やりとり	いいね	いろんな言葉の違いの説明を言わせることで、考えさせられていた。
05:15	C	発話	うーん	★教師が説明してしまっている。時間が無くなってきて、グループ④からプレゼンをさせていない。キーワードの質問のみになってしまっている。

5.2.3 授業者以外の教師からアノテーションが集まった例

今回の実践で、アノテーション結果のデータをマージ（統合）すると、「授業を行った教師がアノテーションを行わなかった時点」に他教師からのアノテーションが集中した場面がいくつか見られた。表9は、教師Aの授業に対するアノテーション結果からの抜粋である。ここは、「グラフィックデザイン」とい

う語彙を教師が説明した際、グラフィックデザインは何に使われるのかという質問を学習者に投げたのちに回答を得、その後教師が自身の趣味であるゲームの話に展開させた場面であった。

表9 教師Aの授業に対するアノテーション結果（マージ後） 抜粋

04:01	C	やりとり	いいね	何をデザインするか確認していた。「こうこく」も新しく導入できたし、教師の経験（ゲーム）の話も学生にも身近な内容でよかった。
04:03	B	やりとり	いいね	1つずつ学生に確認して進行できている。
04:07	D	やりとり	いいね	使う場面を学生に聞くのはとてもいいと思います。

この時点には、授業を行った教師A自身はアノテーションを行っていなかった。しかし、教師B、C、Dの3名が「やりとり」を観点として、コメントをし、高評価をつけていることがわかる。この結果を教師Aに提示したところ、「自身の気づかなかったところに指摘をもらうことができ、うれしい。自信につながる」と話していた。

このように、動画アノテーションを使用し、いくつかの結果データをマージ（統合）した場合、「アノテーションが集まった時点」が明確に示される。このことで、授業者が気づいていない部分に他教師からの指摘があれば、その点について改めて振り返り、確認することができるだろう。

6 結論

本実践では、リサーチクエスチョンとして以下の2点を挙げた。

- ①動画アノテーションを使用して、客観的な観察が行えるか
- ②個人的な評価を共有し、相互評価が行えるか

「①動画アノテーションを使用して客観的な観察が行えるか」については、今回の実践で、授業観察の「観点」を設け、授業動画にアノテーションを行う方法で授業観察を行うと、観察の観点や評価、意見などを明確に示すことがで

きることがわかった。また、主観的になりがちな授業観察や授業の振り返りが、動画アノテーションを行うことでより客観的に行えることがわかった。

「②個人的な評価を共有し、相互評価が行えるか」については、個人的な評価であるアノテーション結果を統合し、比較することで、教師らの授業観察の観点や評価の相違が明確な相互評価が行えた。また、今回の実践で採用した方法は、同一時点において異なる観点で授業が観察されること、授業者が気づかない箇所に対する指摘が生まれる可能性がある相互評価の方法であることもわかった。

先述のように、教師は授業をしながら学習者とのすべてのやりとりを詳細に記憶しておくことや、記録なしに他者の視点で自身の授業を見ることには限界がある。また、研修について考えると、授業の振り返りなどは全体評価や、印象評価になること、複数の教師が意見交換を行う場合、立場やキャリア、研修全体の時間を考え、十分に発言できないことも考えられる。

それらをふまえ、今回の実践は、ツールを使用して、実際の授業動画を材料に、教師が周囲に気兼ねすることなく、授業を客観的に観察し、それに対する自身の意見を明示できるようなものにした。さらにそれらの結果を比較することで、それぞれの教師が持つ考え方や観点があきらかになり、印象評価ではない、教師同士の相互観察・相互評価ができた。

今回の実践の中では、教師の教授技術の向上などは研究対象としていなかったため、詳細なインタビューは行わなかったが、教師らからは「ツールが使いやすかった」「他の先生のいろいろな意見がすぐにわかって面白い」「もっと授業を観察して技術を伸ばしたいと思った」などの意見が聞かれた。

今回は実践のために動画を撮影し評価をした形だが、普段から授業を録画し記録を残しておくこと、それを自ら評価し、さらにその授業に他者からの指摘を受けることで自身とは異なる視点や意見を吸収でき、成長できる可能性があるのではないだろうか。

今後は、同一教育機関での実践はもちろんだが、授業動画の受け渡しと使用に問題がなければ、異なる教育機関に所属している日本語教師の研修としても活用が考えられる。また、海外の教育機関でのノンネイティブ教師とネイティブ教師の研修などにも範囲を広げて活用することが考えられる。また、教師が

アノテーションを使用した教員研修を行い、その後その結果をどのようにとらえ自身が行っていく授業に生かしていくかという視点でも、展開が考えられるであろう。

〈京都外国語大学大学院生〉

参考文献

- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1997) 「日本語教育実習の理論的枠組み」『日本語教育の実習 理論と実践』 pp.8-46. アルク
- 嶋田和子 (2019) 「日本語学校における教師研修の課題と可能性—学び合う教師集団とネットワーク—」『日本語教育』 172, pp.33-47. 日本語教育学会
- 西谷まり (2018) 「FishWatchrを利用した日本語授業評価—評価視点の多様化に着目して—」『一橋大学国際教育センター紀要』 9, pp.19-31. 一橋大学国際教育センター
- 文野峯子 (2010) 「教師の成長と授業分析」『日本語教育』 144, pp.15-25. 日本語教育学会
- 山口昌也・大塚裕子 (2015) 「ディスカッション観察支援システム FishWatchrを用いた実践手法の提案」『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.237-242. 国立国語研究所言語資源研究系・コーパス開発センター
- 横溝紳一郎・迫田久美子・松崎寛 (2005) 「教育実習」縫部義憲 (監修)、水町伊佐男 (編) 『講座・日本語教育学 第4巻 言語学習の支援』 pp.25-51. スリーエーネットワーク

使用したツール

国立国語研究所 FishWatchr <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?%B4%D1%BB%A1%BB%D9%B1%E7%A5%C4%A1%BC%A5%EB%20FishWatchr>

